

象予報士会

第5回定期総会 開催

去る5月27日に第5回定期総会は東京大学山上会館において開催された。当日は学園祭が行われており、にぎやかな雰囲気の中、約140人の会員が参加して活発な議論が行われた。総会に先立ち、午前中には気象庁総務部産業気象課の横山補佐官により、今後の気象業務の展開と気象予報士の現状及び関わり合いについて、詳細な講演が行われた。

総会は小西会員の司会によりまず木村会長による挨拶（要旨は別項）に始まった。来賓の気象庁総務部産業気象課の島村課長には、審議中の気象審議会第21号答申の背景にある最近の気象庁を取り巻く環境の変化、今後の民間気象事業への振興問題、気象予報士に期待する事などについてお話を頂いた。また、気象予報士会設立時よりお世話を頂いている気象業務支援センターの手塚常務理事には、これまでの経過を踏まえた会へのコメント、センターにおける気象予報士試験の現状と気象予報士への支援、会員に有用な気象情報等の提供事業等に関してお話を頂いた。

総会は総会当日の会員数1,528名、定足数382名（会員数の1/4）、出席者144名、委任状784名により成立し、議長坪田会員、副議長瀬戸会員の進行により執り行われた。

議事はまず、創成期仕上げの年として平成11年度に実施された事業の報告、会計報告が審議され、承認された。



気象庁総務部産業気象課 横山補佐官



気象庁総務部産業気象課 島村課長

休憩をはさみ、平成12年度の事業計画、予算、会則の見直しに関する各議案が提案された。その中で、本年度の気象予報士会は発展期の初年度と位置づけられ、役員定数の見直し・外部委託等の新運営体制の構築、これを実現するための会費値上げが提案された。また、会と気象予報士の将来像に関する模索を本格的に開始し、気象庁等との連絡強化、会の地方活動の活発化、広報ツールの充実について検討することが提案された。

審議はこれまでの総会にも増して活発に行われた。セキュリティ強化など外注化に伴う諸問題、将来の模索として具体的な内容は何をするのかなど、1時間半に渡って討論が行われ、本年度の各議案は全て承認を頂いた。また、移動幹事会に出席する幹事への旅費全額支援に関して動議が提案され承認された。最後に会長、新幹事が承認され、代表して木村会長により挨拶があった。

総会終了後は、例によって活発な懇親会が催され、地方支部の紹介などが行われた。総会終了前後から雨も降り始めるなど、長い一日を気象予報士会のために参集された会員の皆様に感謝いたします。

（小泉正明 企画担当幹事）

第5回定期総会 木村龍治会長 挨拶

本日は第5回気象予報士会定期総会に日本全国からご出席頂きまして誠に有り難うございます。気象予報士会が発足した時点での会員数は750人でした。その時は小舟に乗って大海に乗り出すような気持ちでした。しかし、4年が経過し、はっと気がつきますと、会員数は1,500名を超えています。しかも、現在も、直線的に会員数は増加しており、近い将来には2,000人を越える組織になることが予想されます。これではもう小舟ではなくて、たとえば悪いのですがタイタニックのような大きな船です。最初は割合気楽に乗り出したのですが、これだけ沢山の会員からなる大きな組織ですと、氷山に衝突しないようにするためには、2つの問題を考える必要があると思います。

ひとつは、気象予報士会の組織をどういう形で運営していくかという問題です。今までの航海は、幹事の



全国から集まった会員の皆様

方達の献身的な日常業務によって操船してきたのですが、もうボランティアでやっていく規模を越えてしまっているような気がします。今回の総会でも議案に上がっておりますが、どうしても事務作業の外注化をやらざるを得ない所までできてしまいました。それに伴い会費の値上げというものがどうしても必要になります。値上げというのは好ましくないのですが、これだけの大きな所帯を運営していくためには会費の値上げを余儀なくされます。このような運営組織の問題を今総会で十分に議論していただきたいと思います。

もう一つ問題は、気象予報士会の存在意義と社会的役割の問題です。気象予報士の事業を拡大することは大切な問題ですが、気象予報士の役割は気象事業を起こすということだけではありません。気象予報士の社会的役割というものがあると思うのです。役割のひとつは、日本の地方自治体の防災活動に気象予報士が積極的に関わっていくことであると思います。それには、自治体の理解が必要で、その理解を得るためには、ボ



挨拶をする木村会長

ランティア的な防災活動の実績が要求されるような気がします。もう一つは、気象に対する知識の普及、特に21世紀を支える子供たちに気象知識の普及をしていくところに、気象予報士の役割があるのではないかと思います。副会長の富沢さんは、毎年ご自身の出身小学校で子供たちに気象のお話をするボランティア活動をされていますが、これは、ひとりひとりの気象予報士にもいえるのではないかと思います。特にキャスターの方は、是非自分の小学校の校長先生に電話をして、そういう機会を作ってください。教室に姿を現すだけで、子供たちに大きなインパクトを与えたいと思います。

気象予報士会の発足当時からの意義として、気象予報士間同士の情報交換があります。最近、地方に沢山支部ができました。それが情報発信の中樞になって、全国の気象予報士のネットワークができれば素晴らしいと思います。



総会では熱心な質疑応答が行われた

今回の総会は、過去4年間の創成期が一段落し、発展期という新しいフェーズに入っていく節目の非常に重要な総会だと思いますので、熱心な討論をお願いいたします。



「志賀高原のハロ(暈)」

撮影日時：2000年3月21日
10:10
撮影者：松本直記 会員
(神奈川)
撮影場所：長野県志賀高原寺子
屋スキー場
撮影条件・気象条件：
明け方は高気圧に覆われ、快晴
でしたが高気圧の後方に位置す
るようになるにつれ空一面高層
雲に覆われました。氷晶の機嫌
も良かったようで、見事な暈
(ハロ)を拝むことができました。
この暈は、10時頃から、午後
2時過ぎまでかなりの長時間持
続し、志賀高原で滑るスキーヤ
ーの目を楽しませてくれました。
オリンパスデジタルカメラC-
2000zoomにて撮影。4枚の
画像をPictureGear4.0で合成。

「残 照」



撮影日時：1998年10月下旬
撮 影 者：山口昌也 会員(山形)
撮影場所：室蘭市郊外
撮影条件・気象条件：
夕方、海沿いの国道を走行中、雲の切れ間から光線が降り注いだ。冬の訪れをひかえた少し肌寒い晩秋の夕暮れ。

気象現象写真コーナー

「ヨコハマ観天望気」

小川栄造 会員(神奈川県)

毎日、空を眺めて、雲の形や動き、風向き、遠く丹沢、富士の霞具合等を体で感じる事が日課であります。横浜の高台から眺めて、印象に残った雲の写真を紹介したいと思います。



「楓蔦黄 もみじつた、きいばむ」 朝霞の上に、天女が乱舞する巻雲

撮影日時：1999年11月06日明け方
撮影場所：自宅から南方向
撮影条件・気象条件：移動性高気圧に覆われて



「朔風拂葉 きたかぜ、はをふきはらう」 巻雲が真っ直ぐ東西に流れる

撮影日時：1999年11月29日明け方
撮影場所：自宅から南方向
撮影条件・気象条件：北国では雪だが、関東平野は晴れ



「魚上氷 うお、こおりをいずる」伊豆方面に見る季節風に沿った積雲列

撮影日時：2000年02月16日明け方
撮影場所：自宅から南西方向
撮影条件・気象条件：強い冬型の気圧配置で快晴。北陸・本州中部では強い雪続く



「紅花栄 べにばな、さかりなり」 北西方向から静かに「漣」の雲

撮影日時：2000年05月28日夕刻
撮影場所：自宅から西方向
撮影条件・気象条件：日本海北部の低気圧は北東進で猛発達。寒冷前線も通り過ぎて天気回復時



『一か月予報ガイド』 発行：(財)気象業務支援センター 価格：¥1,800(税別)

本年6月の気象業務法施行規則(運輸省令)の一部改正により予報許可事業者等いわゆる「一か月予報」を行う事が認められた。これに伴い(財)気象業務支援センターより『一か月予報ガイド』が刊行された。本書は一か月予報の柱となるアンサンブル予報(少しずつ異なる場を初期値とする多数の数値予報の総体を利用する手法)が主として解説されており、加えて日本の気候特性、エルニーニョ・ラニーニャ現象等も記述されている。ともすれば短期予報を重視しがちであった一般気象予報士において「気候的概念」を持つ事は有意義と考えられ、「一か月予報」だけでなく日本の「気候」全般を理解する上での好著であるといえる。

併せて

『気象業務法(平成12年版)』 発行：(財)気象業務支援センター 価格：¥1,400(税別)
も御一読を薦める。

首都圏で多発する集中豪雨

佐藤尚毅 会員(東京)

夏になると日本の各地で集中豪雨が発生するが、近年では、都市部においても、集中豪雨による被害が多発しているように感じられる。そこで、首都圏での夏の降水特性の経年変化を、AMeDASのデータを用いて調べてみる。ここでは、特に都市化の進んでいる地域として、世田谷、東京（大手町）、新木場、羽田の4地点を選び、8月のデータを解析した。

まず降水量自体には、全体的な増加や減少の傾向は見られなかった。次に、降水の強さを時間雨量で階級に分け、各階級の降水が全降水量に占める割合を調べた（図）。毎時10mmを超える降水は、1980年代前半までは20%程度だったが、1990年代には50%程度に増加している。つまり、弱い雨が減って、強い雨が増えているのである。これらの地点での豪雨の多くは、前線の接近や通過によって大気が不安定になっている日の午後に発生している。こうした変化は、都心でのみ見られ、郊外では見られない。

次に、8月の平均気温と風向・風速の経年変化を調べた。まず、都市部の東京、横浜と、都市化の影響が少ない水戸との平均気温の差に注目した。その結果、1980年代半ば以降、気温の差が大きくなっていて、ヒートアイランドが強くなっていることが分かった。風向・風速の変化を調べたところ、東京23区南部から横浜にかけて、水平風の収束が見られ、気温の上昇による上昇気流の強化が示唆された。

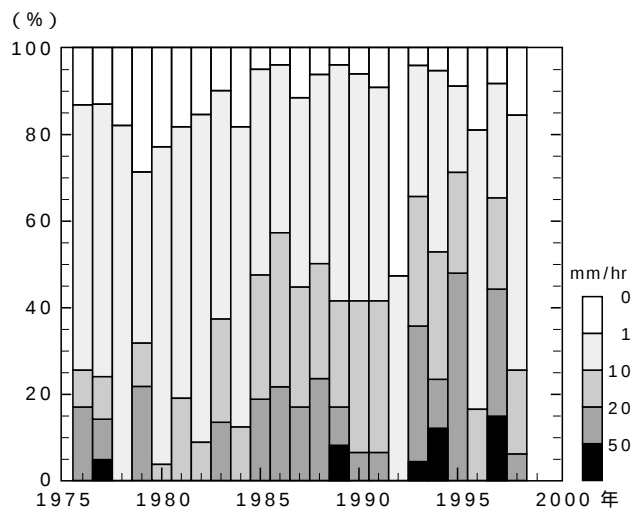


図 降水強度の年々変化

以上の結果から、都心では近年、確かに集中豪雨が増えている、またヒートアイランドによって局地的に上昇気流が生じやすくなっていることが明らかとなった。このような条件の下では、積雲や積乱雲がより発達しやすくなる。このように、人工排熱の増加などによる都市気候の変動が集中豪雨の多発をもたらしている可能性が高い。

こうした降水の強化は、8月と同様に高温多湿な7月や9月には見られず、福岡など他の大都市でも見られない。夏の都心における降水特性の変化は、この地域に特有の気象条件が関係している可能性も考えられる。

＊ 春風丸と神戸海洋気象台 見学会 ＊

森本浩司 会員(兵庫)

関西気象予報士会の第2回例会として、海洋気象観測船春風丸と神戸海洋気象台の見学会が、気象予報士会の例会にふさわしい近畿地方に梅雨入りが発表された6月9日に、雨にもかかわらず20名の会員が参加され実施されました。

最初の春風丸の見学会では、まず船が小さいこと、それに比べ乗組員の船員の方々が大きいこと、そして気象観測測器をはじめ船内の機械装置すべてが古いのに驚かされましたが、機器の説明を受けても、機器がシンプルでオーソドックスなので、私にも良く理解できたと思います。また、小さな船に乗り、波の荒い外洋で何日も観測を続ける苦労話も聞くことができました。

場所を移して、神戸海洋気象台は、阪神淡路大震災で傷んだ旧庁舎から移転して、最新の耐震構造と設備の備わった総合防災庁舎ビルの中にあり、そこで気象台が行っている観測、予報業務の内容、および海洋気象台としての業務である海水成分や海流、プランクトン、海洋汚染物質の観測などの説明を受け、見学を行いました。予報業務を仕事としていない私にとって、観測露場の気象測器や、最新のコンピュータで囲まれた予報作業の現場を間近に見ることができたのは、非常に有意義でありました。

見学会の後で行われた懇親会では、神戸海洋気象台長をはじめ気象台職員の方々も参加され、和やかな雰囲気の中で、観測・予報業務についておられる現場の予報官の方々と、私たち気象予報士の間で、情報交換や質問が活発になされ、楽しい充実した懇親会になりました。

最後に、この見学会開催にご尽力をいただいた関西気象予報士会会長をはじめ幹事の皆様、春風丸の船員の皆様、そして神戸海洋気象台職員の皆様に厚く御礼申し上げます。

新任幹事からひとこと

前田陽男 幹事(東京)

新たに幹事に選任されました前田です。

気象とは直接関係のある仕事はしてはおりません(職業は総合リース会社のシステム担当)が、パラグライダー、ボードセーリングといった気象と極めて密接に関係したスポーツを趣味としております。

以前より、勤務先が(財)気象業務支援センターに近いこともあり、幹事会にはオブザーバーの立場で、かなりの頻度で出席させていただいておりましたが、いざ正式に「幹事」になると、その責任の重さを痛感する次第です。

会員数も1,500名を超え、会の運営管理事務が難しくなってくるとともに、会の方向性の策定等、今後の会のあり方等に関する重要課題も山積している状況です。私といたしましても、これらの解決、会の発展のため、出来る限りの努力を致す所存でございますが、会員の皆様方におきましても、会の活動に対し積極的なご支援・ご参加をいただきたく、よろしくお願い致します。

幹事会の新職務分担

幹事会の新職務分担が決まりました。創成期から発展期を迎えた気象予報士会を今後ともよろしくお願いたします。

・幹事長	富沢 勝
・総務	前田陽男、高崎和彦
・会報	高木敏明、原 隆志
・地方(支部)	渡辺保之、小川 豪
・会計	佐藤祐子
・企画	小泉正明
・ホームページ	原 隆志
・M L	高崎和彦
・名簿	高崎和彦
・会則	山田好義
・事務局	高崎和彦
・会計監事	東 修造、中井俊介

《業務外部委託に関して》

創立から5年目を迎えた気象予報士会ですが、会員数も1,500名を超え、会員のボランティア精神だけでは会の運営が困難になってきました。そこで先般の定期総会でご承認いただきましたとおり、今期より業務の一部を外部委託すべく、外注先として、株式会社第一プランニングセンター(東京 赤坂)を選定し、調整に入っております。

現在、幹事会で契約内容・範囲の調整を行うとともに、実務内容引継・確認のため、作業については、外注先へ先行委託している状況です。詳細につきましては、決まり次第、別途会員の皆様にお知らせ致します。

会報「てんきすと」投稿規定

1. 投稿から掲載までの流れ

会員の皆様が投稿された原稿は、以下のような手順を経て掲載されます。

「投稿」→「受付」→「査読」→「修正依頼」→「著者の修正」→「再投稿」→「受理」→「編集」→「掲載」

2. 査読について

- ・応募された原稿に関しては、幹事会にてその内容を審査します。
- ・原稿内容によっては、幹事会以外にも査読をお願いする場合があります。

3. 原稿の修正について

- ・ご応募いただいた原稿に内容変更の必要性が生じた場合には(掲載を前提に)著者に原稿修正の依頼をすることがあります。ただし、最終的な掲載・不掲載の判断あるいは、掲載する場合の掲載号については、原稿修正完了後、幹事会にて最終決定するものとします。
- ・また、幹事会にて、文章の内容を変えない範囲で若干の添削(誤字・脱字修正、表記・文体統一など)をすることがあります。この際には、原則として著者に連絡することはありません。

4. 掲載の決定と通知

- ・著者への連絡は「受理」段階で行います。なお、この際「てんきすと掲載原稿とすること」のみを著者に連絡します。
- ・応募多数もしくはその他の理由により、掲載号が変更になることがあります。

5. 応募原稿の注意事項

- ・原稿はワープロ化された電子媒体によるご応募を推奨しますが、手書きでも構いません。手書きの場合には、文字をはっきりと読みやすく書いて下さい。
- ・図表に関しても、EXCEL、LOTUSなどの表計算ソフトで電子化されたものを推奨します。
- ・制作コスト削減のため、手書きグラフの場合には、方眼紙上に定規にて清書して頂き、グラフ上の各ポイントが明確に読みとれるようにして下さい。
- ・応募された原稿・写真等に関しては、原則としてお返ししません。

編集後記

今回より会報編集作業の一部を外部委託して行いました。レイアウト、写真の仕上がり具合はいかがでしょうか? また、投稿時の利便を図るため「投稿規定」を設けました。よくお読みの上、ご応募いただくようお願い申し上げます。会報「てんきすと」では、引き続き会員の皆様からのご投稿、さらにはご意見・ご希望も随時受け付けております。(編集子)

気象予報士会 E-mail yohohead@mb.infoweb.ne.jp

ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/~yoho/>

気象予報士会メーリングリスト加入に関するお問い合わせは上記E-mailアドレスまでお願いします。

発行日 2000年7月26日

発行人 木村龍治

発行所 気象予報士会◎

編集協力 (株)第一プランニングセンター